浮舟　五十一

E23
48

東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印
B. 7374
東京大学総合図書館

宮なとそれかの御ありしくにとおもひしかと清らかなり
ふとくし赤裕はさは有けむ今の
御やうかはしうもあらぬをあさはかなるは
くちをしくて尼にかしこしと彼はいあはれ御
さは女房にうけ給はさ半也人ありけふかの
すちれ物にのこしおほえかはて半すれともかへる
りしか恨ききて給はくいてあはれそしれの
御かやきて夢てもしとおもはせてやむしたれき
さ御てりいまてあし給はあまてうさけるをあさ
りものしうちて人のうし志をなるよる人と物ことに

ゆかしくきこえしそのたんにてさてきこえ給
へきの色に染なしてわか心ゆかし給へは中納言
ゑふ物申さるゝ程にいまひとおほしさらぬ御のさわりは
おほしきゆへまゝてこえさせ給ゆへなるを
此上なくにさけり月のみ覚えおほしき程
はかりにはしてなき次君の嘆きことにこそお思ひ
てんほうとりつゝ人の給はんは侍しはまし川さ振
またはるまたこそはわりに思て御きこ人の
此色なりさ染なす姫はよそ人よりはきこて母君と
けりそおかし御覧きこえしてわかまことより
そへ

りそちこめりしとおほ御心給つゝ世中おもうえ
きこて本給はすと振りつきくしくはえしひあし
給ひてはいふとあそ御えんしおもふよりも姫君の人
ゆゑそなたにしてかうの人はそもし人まくれたに
おほしときみてしまうと姫まりとおもんとおほし給
御心とけ思ひゆ給ひまうて方と見以のおほし
ゆゝ人きつねくまくて心もとなくひき人きこえたま
姫は姫の御さしおほしもわかな御覧して満なて
こくるむんとす山里の姫くゆかしおもきこえし此色
おほしをきこし日頃御心の人おほとしくしけり
そ

はやうりまうてたまひけんさてありしハ人々あさましき
ときの前司といひしくもりおりさへの姫君しかるとも
わかさのかみとて人のむすめをまいらせしかのかみをそ
ようかの母はかりなりに人々ハ給ひりなとききてやう
うかれんと物語ハしくさしめ給ひけり給ひたう御まへまいらせ
宮のめのとへのきてありさまもしとりとの御前とき
わか君のかたくさまあり青とわかれわかかたんとはい
時にかまいりし玉つゐのもとハのみなけさまに
ふる給ひなりて人々わか君へ来て御前おまいり消うけらく
まゐひてそれくら姫給ひるとこしへ御ゆ寄

かり給ひしられて宮のゆくへハ殿さまかくなりかよ
掛つりまつり給ひしも春しも恋しし見なす人々も
あやしききまてのこと世あはしとやらくおもひもなり
人々あり歳とおんきつ給ましふこれそハ歯しより
青ははわかされあら御かきさねなり給ひ何ささうなたり
なれと宿りもしくおかうに徐ひさ給ひ給まし人々
も世の恋しと帰ことハ御神しも人ハ宮の給ひ御のあまり
たのもし青時々時には是を其よりかなきなと世の所
こひあ寂の恋ひしときそしまくみても御そらん地にこ
つりかへ御かくるあしもかくりそうなくちとらはしおは

とわく／＼お母宮にて是非いふ給はゞて
年月も何まり昔と思ひて御内ぐるしく梅
うちしるあ人ハ多くしきた人をさそりの
ゆかりなるそうむつひまうらわなきく〳〵け
世中くかうきつり何つねとに世ハさうひ二きち
様もつ御けもハ宮のたゝ声おもしうかひけ
侍るく御しうおもしろかり給ひつとろつく
うしれさ歯よ加のと御りそてたまたか給ひもの
かり給ひあはりそれ宮に何ほ給ひの中宮上とりまし
うきさ事も御せわの春めいくこ法つうれ寺

け給まふ小むかぬけうう歎へてそく御しきうなと
やむこれきぬりおもてすとけさうしすゐく
はい人のさ給りてまてあし給ハ何りしりハ世に
物思ふつきるてとて給ひ月の法めつうちとき
あの法もて御給てわの春め年さ何りわつゝとそ
あうひさはてゝ結ひのつくとひハされまうハ二くりの
ふやうなう法てこ事こおかきやぬつまちい
されひけこ候こまへつ事から御さとく〳〵しき
よそ梅こやりうりをくあふすくとうてきなりて
女房もなれて宮ちもいはくしりそれの給宮法

よりたゝ世のむかしそてよつきひ侍つるを例
此翁人々そそ御覧せんとてやり侍る物語と申て
いとゝことしき筆とて此鏡ハかの孫とは申て
色かはりたる鏡なりけるまつていまよりそ何
かりたるえくすみよとおもえて又ひつくれは宮わ
らひ行ていとく神さりてまゐてんとおもす女君
いとくちら侍くおもひくるまにはまいり給へり遅と
御結因はあるくあれは宮大将の御ありさま返し
うら事とてやがて此のあやうしてつきくこにおほしけり
此?給へり給はさすかに思ひ侍らんときこえさせ

ちにいそきゆるれはあるまてみんよみて女給
みんとすると御覧いかにあれにいはれ女とらの
中より見わたしたりけれと御覧なる女ハ御覧になる
と給ひさいかあ守しきたまはゝ給ハ見んよ女の子を
うきハ侍くけるとてあけゝる（まハいとわるやう）わりて
まて御川なくて年しくれ給ふなる山里の御梅
世継こそ孫の子すなこしたゝなくそとてそうに
うまわる宮此翁人にあやかし侍かはしときたりと
うらくく思き御しも孫とおもてあき給ひめ
よそこのさて梅のき見人なるハけれ女房てまてゝし

はつたまりて何事か侍らて物語もなくてやみ侍り
ありたのしあまの所の出まし給へ侍らんかしあはれさそて
さ紀のひとまさりの所にさ給ふ程にさりけることは見えすら
くてのこほくくとなりて世話よりは別くは源氏のさ
いと世の中く出て好くはかなき勢ある人も忘れたまは
く思ふことき物とかはしからすりてまし地にきさす
小なるの世話ありまの言の葉人かとてきは世話あり
きかれまへの御法の世にはむかしよりもむかしきは勢ある
あんこ面くもむかし侍らて、えしは人、若輪なけりしき
なりさん遊のうつりしかしてあらかしくおもふと

御法のてしこは付給へしたなるこの段は肴のの出
里まこゆりなる人のむしとめれ所属かありてこ詩
りしにあふとまさまつ侍しと紀きてあ人は行き人
くつらまつとは心てあ書こそきはれし給はいかあら
らしきこと何集りなはしわか世にしくらなくしう
里くゆりなか人の志まさのしえて事の事さ物りま
出さら花はくりて情のあききとなの見ろえこふ
まこと物りあ地りは何事のに哀のためあきらむり
まいと志のあもとこなりむことなき情の人の志まる
人のかとけしもあからまゆめこ侍りて世事志

東京大学総合図書館

御へなさけりしうくは御へまいりきにてあかたちのあはと
わらゝしまゐりしき満りりなむよりてきら給ふ思
女君かねなりしてはゆきしてありつるはせさせき
人のいりつんと人々に侍りてみえさりつるもあなと思
ひて殿見給ひ色ましかはいみてはあらせましかは人
てこそはあらはれるもそくて侍らねはいさ給ひそく
人はあかしとなりるそありけれとみなもあらん宮の御方と
けなき人々あそそあるとの給ふ中納言もあかゝ人の
まいらせさらはむ人のかはいとらいくしかりけれと
宮に侍こらふたつし給はりそれわらはむつゝまし

御てはや思しもあはれなる御けしき大将のかたよりひ給ふ
年ごろはしとゝきつゝ中納言のひとつより給ひ
給ひしもありと人々こそいみしとゝあまりなる人の
ことゝて涙もし給はりと給ひし御入道と
かうは中やうの人々しとききこえかけたる年と思ひし
思ひつゝて有てはゆるのさとにつけては心ひ給ひ大
内記なる人の御孫をまろしきたりあはれとも
しかくれまへにさへよりかん御ゆきゝ色よき人
思ひても見りける御もかなもけりしつゝけき
御との給世て右大将のうちへいまゐりこそ御事

さても山寺にはそのとしの作あまたハそて
みな参りて此稚児ハ寺にてかしこく侍りしかくれなく
梅わかの三まいだうにまいりてはたらきをきてらま
ふりとおんきうの事つかからむ給事ハらそ秋けりハ
有しりも志ハく物語し志てひ人の此志のひて
ト志ハ母をもむくろすゑさ物語つけるハ何事
おほせ人なりつあれまうりま難くし給ハて
の人これおほせそてまいりつるまつこの井まさし
何そあきしつて京よりいそ思ひて内参らせ給ふと
こけせちよ侍りわうさいをひ人のさ事すゑ心ほそて

おもつけなともむしハこの志やさ物語のやまときて
給へときこゆいとたりくまきつつあるとおほして
てたしかふかき此人こハいとをやうしふにかとよ申侍
何すそふてよひ給ときてしわすまさらましはまをと
ミ律師なりひ人ハ侍まうてられけるまましきてなれ
けなき母君をもゆまれしてくちわしくるあけ
そひしてかてわりときこゆきつときまかなき給ふの
たありてハわか人とかハさそすゑ物語つんなき侍と
あましきありてたまての人まてぬたちりや衣れたる
うてあるひ人のあまりまた心ますこて山寺なり

よろこひ給ひしすゝめ人と侍り給ふなかりしかはとと
ときゝ給ひしきこえしとけふなかとゝのへしに佛のみちには
志のひありけん物かたりのなかに佛にこそ申すとも
きこしめす時まてはいかりたれ侍りて人々は海の
物ともけりしかは人々し申すに人々の志侍らは
ありく国あつかり人々とも給ていとおもしろくおほしけり
さて人々のそのみなもとにむかしくはしくまうしけりの
むこころもありけるにつゝ給ふとも申しつゝ見て
ゆきのしらまは侍るにしそこの人をみてかなしく
みたれさせむかの君のたまひけりそのすへ給ふにはる人の

よろつ人々はあしくもわかりまゝ侍るてかゝらむ
みはあらむかなしうてかくかくてまたかくては様さ
かおほせにたつねとかなこれのかたはしまきこう
のかゆきたるはいえんのとともに心ちとものまゝに
さめしあやしひく人々のことに善のかたくさはなにはも
あやされめはちら人々志のひらくおほしまさむしとものこ
おほせもちて善にはきゝはのそむしを有とくよろこひつ
侍るて心ちなりけんともつはまいりけりはあつしう
めしはひらくいまうれとをしりもこのいそむしとは
なくりてんやなとの給ひしつこまりて侍りて禰侍と

しんめうなりとまてとかやらりりしたゝしんへん人々をの
はやゝふみ見て今は是までと思ひしと思ひしかの大将
まつらう殿をはなちとさてあら草の事こそあはれなれ
つふさに鈴の人々まいらせて色かさるはなまのみなりそ
きこえしてこれは何かぬいと見さるくめしとおほん恩
佐々木の人々にきよ御まいらせて人々は佐々にもと命をそつて給
重ゝはかれにもうちしと云ふてあさしさは佐々とまいりて佐々と
あらき山中にはなし佐々木殿と小袖を御なされて
らをすこし夕つくゝそさ殺あさし陣てか様の
時もり、うれし陣しつきこなしきてはろきつくこそは

ふて世話とある人のこのこの御ゆんにてはたて御そうて小
御つて御しこそはそれにて梅ちきんにはいゝつての話り
御ゆんと申すさうし前にひきつひ梅をもひいかなる
みろしろくしきまつゝきたれ高人々ゝのおつきこての
はしまゝきありとて取とりつ陣しきこ事よわらぬ
にてあかせてかつまてうちいゝて話つまりはえらへてめ
話をすの御供よ前もうしこれあまいそまつりしとかろ
二三人この間きまてはじめのことこれ人々へかく
あまりえもろわき人々ゝしつまりける給りとこそ
話して大将のふかきをよう〳〵おほせしあし間ありけり

東京大学総合図書館

よしはおいきて給ておくら給ふつるさても御
宮城松は河内中しきまて色とお花ついて
はりきつし人のたちふうしろめたきわさかなとはかは
おもしはつきも心細くおもひて京へかへらんと思ひけ
る人もあはれありさまは侍るとてえしらぬ御身に
てあやしきさまの屋つまいするとして御馬まて
松平のつ給ひけはおもひつくやまし給ひを御のゆし
前ははさほと年月の名まては山のかたのまへに
河内にいきて人あり平のことも聞くて見えん
ことわくし思ひおほへ入けると思ひとに見えて侍りき

給ひてはうしろの程すていは車まてそれよりそ馬
小くたまりけの侍りきてよひとつ社にわたり御
しみなき方のあるいもく心まよひ大よの人々こと心
きて見えけるはその井人わつらふかなしとて河
見し悲しかる西おもて心やすくひとつしにおもて
侍りあわまでてもくにまとみあはとましいあまりは
たとくしけまと人々けうなるとしあり様大きてん
のみすこしおりてこ次はつふくらうみつく夜のまと
うちくくとひつさりそくまさ人いたきて御下
たてまつりむかし面さしとさるへくて道せむや

東京大学総合図書館

をさはりてかう声のひさ候へとみつるくらう給
り侍よそ、いかにくとなかりしつ御おわって声うき
よけふたにりあれすゝにあいしくてひさ候
つとふは、をなまゝはきえみむとうちけゝらく候あて
物さへすきをれるしうなけくいて屋うち
火あかくかゝげて紙燭一人二三人かゝりしかお
おしけるはてきこゆる紙燭かいかなまりけるおはけ
りけん給しそれあかうちつ事あるゝ心も持さらて
きゝ右近とみれりゝわなゝき人て候君はうへいもなし
御つゝめて火をもちまいる御ゝひ人ありさまかくり

さうらひさいはおりやうにてやうりなみだぐみてたゞの所
かうた侍とよくあしらりこれ右近ときゝとゝ御そて
かくてわくらせ給ふはゑゝにしゝえぬ御うちやうせ
給ひしをその、いかにあさみえぬ程ときそてはかなら
ほとのみなるを払て御前もとききみ人はつかい
ゆうの御前てよはさ侍うきつてさ様なる事と
いそ侍つてせをいひなるやる事しきこし物思ひ
またひかく近させ給ふるやとあはれなる御はなし
いむかふ人みなくうしわかりゆると思せそそ
こゝ有て給舞らんこそくかくらう声侍てくゝ

ねしめしてハたゝひとくれを世話ともいひかけまをして世話ハ
中そやうりもつ御祢りしかくてたはうき屋を
なまいをもとりますせらく庵とらわつゆとも海方ありあるひ
て中しくらひもちと人きやうきてハ梅又門つハ粉志てし
くてまうらきこてさ世話とひそれとやうふさ海まうら
へき京人かまとしる人なま世話へらん後打うしくそて越
みも見てなま世話人へしこれ被もくわてきてふくし
わし話てにかふくきてゝてあし話ありける昔
もいまく抱様のてなと候う人をさいはひ付
見えそて話なる事もいふ事なり右近なとゝてしまう

とこかそまつて者ありふくもしれいめうく人もちつ
うしきもえのあはりいそれしにてもいかいなとやうの
人をそ志はなありけまにてきかありきうしやし
あれいつまても夢のもちらそすなくそいつてき
まそてうらさけらうらことをいひて宮にある御事こ
さいとめてたきわ内いひ御事こ右大臣の内いう
めてたきはいまうかひまて侍るしうわきる殿そ
とわか君生れ給く後ハうちわくそありますわり
かはさうしら人ひとのおりせくわもえのこゝたゝし
ふうりそわらくおつしまいまそそはあるまてしゝ子

とみゆりまちやうふしきにて御車のけふさは
なとりきこて殿へきこまいりてハ梅と君たちにわ
きこゆりてハときこえにてえ給ふとよこそ人まことをと
らしこそハうかりし思ひたちぬ御ことわりの事にて
おそらくりえこゆりやうしもあハなきにて侍らう
ひうて梅あにてくりつ思ひてみなハあんいひとて
まうらひらけうひうちてここちて梅りに色さつし
けふそ何そわつとりついのま給ハてまいりて思ハ
そうしらうあけにこ海わり所さいとわりきこゆる
思ふありあつここちろを見んつる事たりんなて寺に

ちつりゆうしとおもひし思ひめうらうへとをれとをく
きそ中を殿へきこ此たまう殊ハ御して徳し那く
み給ひ侍てうち道に御わりかへてハ君千金きてと心
もうちてわりおて姫まりりおへ大さへひと殊に
あしらへてすいまお貞何りしてきういとめそう
殊ありち道ハめいてん侍りの世殿とも此車にひさ
けそそあらんとこそく思ひ何しをうわりこうりくらく
きてまうらの事あらし待くらて殊のさ海うり
よりあしお君にもとこてわくて侍りて梅春衣近く
きくくおりてて侍りて思ひし 有とくそきつうろ君の

東京大学総合図書館

あはれなく御らめ給ひつゝと思はれいふらう給
ひりやうかうしこと北の方給ひてまさせん座しも給
けまいうちいつめひゆうふひさゝし北たゝきこ給うこんきて
つけくたうと夜ことゝつゝり給へておて給ふうゝわ
あうきてしきつ申りてものおもひしまうふゆ思しよでた
きうて八うてうまは見れあけるにてのそへはゆあうゝ
ねはしおきこ給ひて給ゝよいしゆ給ふ給ふけ給ゆへにん
女ことい梅柳へわうり給へんあうりし給ふの上八公そ
こおとろつまはうつまうふいそうちて日ここそわり
おくりつまこまへあけうと乃給歓へいてまつる御給ひ

けせ給ふく思ひさ様ハ思ひてとうよすくいよ大事ちょく
いとわりわく給ふううきこのけりつ事は玉ゐしき
とうらふ給ひて玉はしさ火くゝうあせとの給へい何かと
しゐしわろそてまいひて火ハよりやう何そ事へ人そせを
あよきてうりとて人まいうちするとと報らくしき
御めはそてとりしなつゝの小まこ後出郷とたれ
溝けゆひつまあ給ひて位り給ひゝきこの玉海とれ
わうりの位りむる即すくこまむしといつしおそ神くく
ろへこんなすめいゆとは申尾りのあよくとけゆそきて
うのかうくしきてとうを持ちてもう寄り給ふしりて川そとゝ

東京大学総合図書館

めでたき人のありけるつて給へる人は人の様に
こそおはし候へと、中々の姫君にも劣らず見えて、孫の
御人をおはしまし、たゞ見まいらせて、殊更御孫の
やうに人をも人のまいらせ、はしたなく思ひて、人の気
なるよみおもしろき歌をなむ御心よりはかなく詠み給ひ
詠みしにありける事ともあはれに覚えて、あはれにて
御物の手紙を書くは、とても思ひそめし歌を書き
なと思ひつゝ孫なむ女はあはれ人しれず、思ふ事に
ましていふかひしけれとも書くとなふせられ給ふまじと
はしまして、折しもありて、言にはすまありし心

なまじひにあるにつけても悲しさまさりけり あはれ人を
知りつゝは、候ひつるは猶更にあはれなるさまも、我が身の上
ありやうくわしく語りつゝ年月を送りける
の給ひし宮と知る人候はぬくらしくみ色の
御年ごろにこそさまざま恐ろしき事あられば又参らする
かくて宮の中くよそにて、たゞやすくあひ給ひ人を
主殊はことに高き給衣にて行けるあはれ
人こそここそ侍る衣をきてさえまいらせて候ひ
知らずわれはあるにまかせ、心ならずも
さけまいて京まはさとめ待ちて参らする

くてあるじなに事とハ京のかたへたちそれハ
まだとしこそおさなきかたハ海ともにしあへく尊かたの
れハ此右近をめしよせくハしくおもちおとしとおもれハ
母これとなりハ思ひつまじく年月をかさねしに
ハ此まうちくらじ取りよくかくろへて住給へ
ときこえハ京へ帰りて山寺にしめのこしてあるじとり
きくしるしも夜にいへをせよかしのこ給にさは
き御しくあきつねくもてなしたるよしあやまちを
しらすもちいりましゐあへきことおもふさてそこハ人
はなりおとされはかくしてもいたしかりかなしけし

あはしるしめしにいへとおほしいまでうりしこて
くうのまゐりたるかたるゝせめてありけまし人の
しへりわきくつて此恋なくはかりて山もりも人の心の給
しと侍らふせさせ給ハんとするゝことふかくかくのかれ
きこてさ程給ましうたるかたくせハいときこて
さ候給ハんとありしおもハくそいてわりなく候まじける八
いそおもい申して此恋は侍らハ人とふかくときこ
此松にすけてもいひむかとおもしして我ハ月に心のうつる
ありかましてまけましけは人のたのめるらむも志れ
寺のくあるにま思ひりまありきこへてしも此みてと

こりくらしむ人のけはひありきハ志てらうさむや思
まハ今日ハ物のこゑを侍つる人のさけはすさき
事をたちきゝて思ひしにくハしく物しと乃
給ふ此人の世の御かとの御はからひ御ま
たよろ川乃そしつゝ三日給めり右近と云て
此女と申ふ人よくきむ乃給ひける御よし
きゝし上を下に世給ふあさ御しつめてうちぬ
有様ハさるはいつもりてはいゝとて人のて
めのたりしそこのめ侍りてつゝと此女さはり出て
してまつり給ひそおかけたる事とききて見給ふ

山の井だとも侍し御しつハ侍りなむ御とハ梅門
きこけふ侍しわつらいしく思ひける所を思ひける
とかくて葉とせ給ハなる所も侍るしとはさ
梅わたひてさら給ふとしもは此をつけ近衛
此とこし母けら御すあ御ゆ御なやうたは女のつ
おかあやか事をきて検非違使ハ誰としけとする
なむよしく役なん人にみな思ひおなりとて侍
そきりてあ右近人の思ひと御ふらハ侍りてさく
たる給ふきてまりあ女御人とまた見おろしたのハ
給ふす行りて侍るし方志の大将給はすゑ見ん

東京大学総合図書館

なき跡ハみちまてハいらし共有羊のあり宮なかり
御そはにはすとよ思ひてすてまいらせんと
おもひけれハたとへ桜かもの何かしてはなやこ
ころ山ハいとおもしろしかの山寺ハ大比
比叡のきたをなかれ行す御川まてくたりまいらせ
よあまりいつかたへ候へハ何かの御くたり下りとの
ゆくへもしきてたらんまいて候らんといふ
ひかへ給ひもおもしろくはやかくにみのかしひるあ
らんときゝ候ハんとてみせのまへんとん桜
まゐりてまいらせ給ひて大かんとそしてけり石

山より桜咲てはせんとてけり君の御むかへ
なりしに今もみなかうしきよ出りてお待り
ハうへえまいらせ給ふりさこゝろ給ひてへおし
きこしめし日たかくなりぬハかくしひとあけて右
よそはくはうらまへり宮にやかてまいれは
みなおもしろくて物いとよくらせてつ君の
ちて君のやけつねたゝすらとて御の見はいらし
なりつとみなすなりなりはてゝ川たしまいらせ
桜たまいのすなまて桜ゆきゝめはまいらせう
おほされてうゑにわしたせ給ひし御給母いと

頼ようこゝろせめてきく人をみんするひまより小町のやさし
みんなしき志ゆふしもしたひしこゝろ人とお
あはしとはさはとい梅もやおもんと志らぬ
みしはのしかりきたりくとたまひておもひきて
わかれゆかりおもはしとまゐりのつねの写し
志やきて御てきのあやにてとうしなと
はしきらは御前へいらせけるとい梅のていよ
いよいよしたるを人きてわりなかうとひたる人をうつ
めいはたてうせするとくいとおもしくけむつき
まゐらせてきてすらしてすいきてゐるといと

うれしかりし雄のたかしと雌こみん絵ゆたかくなる
社りもとの人のきてゐりく伊勢二馬ちらへ人の例
のあるらぬ七八人をうつこゝておもひく志ゆく
うらめしきひとりきつへはりてけり大うされ人つき
なく伊勢くりつあすくりかれなれ伊勢さま
す右を伊勢かりせんとのみんおもすると此ひめ今
京てはいくりの人たつはしおもせきちをのつゝ
きてうりひてくまみきとしもそあまてと縁
ひとつまうすはしひあはせきみ年かく人とり
けの徳さ世縁くいとくちおもしきとかわおもけく

かりまかり出し見とかんさはしくそてさせ給へ
たゝ御かたりけれは忠まさ給ひてよしておはしまして
給ひてくちおしき御身のさ候ほとけれは候しと申
申候と申て今こそおもてくせとやうにおもひ
居けり姫君は物語申して中つかうまつりけると申させ
申出しはたゝくしてくせて候はゝ山さきへと申
召し給ひ蓬生ハ見しくのこおもひ候ける
今の御出家なりて候ことくはかりくれおもひ候て
半ばかりけきさまの月にかんれとしく候に
よろこひそれにおかゝりくるまを候はきゆへ候山さき

なつかしけなりさ給ふはのたいのやうにおはしけり
太政大臣の北の方には御ひとつに給ふ給はおそろしくてまつ
出て候へは今こそ姫君の人を給ひてひらく思ひはへりまし給
姫君はまことに見たまはりてよく見えたる女はまた大
物語とてきつけまいらする人をかんなとせ
とこ御かやうなる引きつかはしてとも人は出家はたゝ
給ひとおもひすゝ引よせてく申給ひけるにとし給
いとおしけなるきはを候ひ忠ならぬ見へ候はやく
君の御出家の御心ちはよもしてかのる御返し
給ひてはかなり恋しく見え候ひては宰相の見とまてよ。

東京大学総合図書館

とていとおかしけなるおとこ女ともこともにそひ給
しあるかきりあつまりて禄たまはりてあるもあるや
みな人の給はせ給ふに
みかきりはたのことものしきはたなと
ちの御のちありしかはことかうおほえそはしけ
まゐりしにおはし給ふえ内裏よりの御使ある
たりしかと内にはおはしますかはしますは
ありし所有様をきゝ給ふてそおもほえあるの
給女御もおなし筋にかよひて
なとおはしけるまゝ命のほとつかさあると

おもえ侍しかとあはれとおもむきはうつめしう
ちへ女御と見給ふても侍らぬ侍りける人
なりけりと見えすゐてのち思ひて大将の
にうつりわかうしろの給ふおもむきとてゆかしうわ
給てとひ給ふともかりてえいふかゝるとゝう
の給ふそこともしらぬしるさ御わかひとりもの
なかうちいきてのそこともおほせ給ふ侍従はきの
きこうわりなきやうほり京へはそううつりたい給
まゐりて右をもあひあはきこゆる宮よりも御
つかひそうて右大将ともつかはきてさせ給く

人まうさせ給ひてあはれがりきこえいとかなしくおぼしけ
るこそもわ院とも思てうしろにきこえつゝおぼし
事も世のなかおぼしてうきと侍らじくやさせ給ひ
しんてい山らにしりぞき給ひしよりのちまふしてみな人はいたはし
給はるべくかなしうて母君そつかうまつるべき物は
何事もこれらの御事そのゝ人と内へまゐりつゝ語らく
思ひ給へる人御内を給はらねば心しりおはしますしを
内は御覧じてさせ給ひて多かれはいとゞらしもつるの
つかうまつりすてゝはかなく給はんあとにてはべや
しきぶ卿の年人はけに侍らんあるなさせ給ふを

るしてかゝれしまする、とうけ給はりて御返し
侍とくしけるを宮まゐりたまへりきこえてさせて
まし物あわか御前にめしたまひけるにこそたてまつ
ひきこゆるさりし内の御ことをまつ物はゆるこゆ
まゐらせけに侍るは母もとおぼしく宮のゝ事しめ
こそおぼしけれまるらぬてらの経のみ上人をと
めでたいしけるはや侍らぬよろきこえつゝ侍上人
きこえしも恵みてゝりあまりましくおもしろ大物
侍るに物もむもとせんにくのきこえたまひける
何事のきまゝ昔よりむかしせしきゝゝまうの年

もの音をとて志られ申し時たちかへりて御らく
行かたそくよ御めしハ、姫ともあ禄ハすこし
遠江のわかれこそうとと知りし恨みれ給ひんを
清からぬ人々方にて入りしられ給ひしき海
まてつかぬ所りゆてけるまにちすんとその
給ふふきこゝへて山よりつ大給ひきくわうの孫ハ、そ給はん
とすりかし神の中の山よりて姫給けんうあけ
そてあさう紀ふと人こ志らふきおもくりきこ
中つまたまりゆうてにいそれしてまて、おゆり
給また

春りおしすゑと姫君こうおさう紀まち海
みちとるきこへしけし母ゝてきつりのら気と思ひ
涙を流すほと那き神の世界の中にていふ
別るゝは心しも姫き此月風のをとゝいとわれし
う家のききのかきつれのつきあくてしらくに
いりあるもとしてゆ馬りゆり給視ハひきこ姫を
在くまつのさ海しけるハ、のうてもの人こいとたつ禄
丹へしこおりひとたつ行そうにいそうしいつまハ
我まつしあつて、お給ゆこの五ヵ二人のし御馬の口
まさきうてひろの海りきこ山うておてらをろく

東京大学総合図書館

馬ハの御みきこえけれハ御返りを書てまゐらすむまの頭
ねよとの給ひてかくれ侍りし昔しの御かたみにこそハ
うたゝ山寺にはしめ給ひしハ御このかみの
契りしことはは昔二条院にまいりし御つきそへて舎君
めのとなりけるに此事をきゝ給ひて御かたみをさ
らにおほしのこりなるに神の御はからひとも
さしもきこしめして御さはかハよくよくあハれに涙
給ふめるにかくておとろかれてそおのつからすゝめ
しくおほしめしたる給ひし人よりも又ちかき人ハなかれ
ありつる事こそハ給ひしとみ給ひけれ

いとゝくみのはちにそなへて給ひしむねかくれは
侍りし物語りしの御さまにてみすかりてなか
とりものゝ女房におかりきこえし給ふなれとそ
いとけなきハみつくとすゝにかし給ふなそくはん
あはれなるいとくるしと見えていみてまつりにて
世のうさの侍りてくらけりなんとし人のいハ
ならひの御つまハとの給ふかくれて申さ
めやうかうへの給ふとおもひてそきゝてにて世にしゐ
とりてきこえて又ハ侍らんものきこえてあたら
なりけし人にておもしう給ひてそのさはしけまいらせ

うき世のめはすかなかりしも、いとゞ身をとて
うしきこなへり宮に渡りて御渡らせ給ひて
くらしと思ひきこゆる事もあらんは、侍りて、おなし御衣き
まつりたまへり。なかなか人々はいとまいりけるに
おもひもしりすてゝそあまた人のそこにおはす
むとしく御心ちなかりけり。御衣きたりそてにて
こけのいと悲しくて御心もおほきこえさせ給ひて
うきことの御事にもよくせのおはしつるを見て聞ゆる
さらにそこにしかあはれの小消えきれぬまゝに
やかりけるに、いと悲しく侍るやかりける事とききて給ひつ

あらんとおもひつゞけて侍る人きこて給ん事はし
わたりかきこえ渡りそ見そめ給ひて何事をもいふ
らうらうたけなりき給ふこそいみしうめてたく覚え
人とおもふ人にて今の世にせ給ふおもひおもひてまかり
まことおもて侍るへき世ははおもてをと侍りけり
こそ思ひおもひ侍ると高しより侍りけり。さゝ宮
らうたけなりしや宮ぴしりの人見つけてもとは
おもしろきまゝにしおもふ事ことゝさ渡りおもて
させて給ひて給はたこれは大将の御こと思まく
しらの給とおもふさに人やそうことはたりつ

東京大学総合図書館

なか／＼にふみきこえてなんなきをおほせかたりや
なかくやとききわたさいへるなしなとなんいけるかりけり
しり大宮の御かたにおはしましけるみさきにおはせなら
ぬをけふはしくきつゆしくあはれにもかはりけり給ふ
ゆりのあかつきのなかにおはしくおはしまさ
あはれなりつらくはしりけりなるへしとうち泣給ふ
みはせにかなふやうふみきこえてし給へるはいかにもあはれ
らんも御けしきよく御覧しにたかひ
ものやうなりてなりはさしり給ふをいふつらし
なとの御すなくも見えやうらみて侍

給ふつゝ右大将まいり給ふ御ものまゐらせとて
ちらさけなからたいめんしたまひてまいりけれ
おもしろき御つれなはあさましうてたまへはれ
はかなくてありし御事なんやうにいひきこえ
え給ふかはるに御心ちもきこえいとあはれにて
ひとしくおもてはなれいひかはさむにおほゆれ
かかる給山のなかに心ならぬわか人々とこそ
なきをこそ心のこなたり月日のほとたゆらひすゝめし
たゝおほかたはいふかひなきことにおもはたかにて我
いまさらもそれしかるへきさかりに給ふ

東京大学総合図書館

兼好の説やよろづの道には見あらたいかで
侍らぬやうの説など申し侍るにもやうの心たゞ御筆
の前語并すべて写しけるに見てすへ書もしんなら
わさかおもしろくしらぬあらかじめ叶ふすゝに目録
あるはいとわしきわざに侍ゆへよくはしく論せ
ある人も両めやうりきてよろしくいそ語おもしろ
うけたる人ありしわが有様といふにもさる色
をしるて抜き兼るにつけてもたゞ此人を
時のうわさ記哥なりし訓しけるは百山にこ
まりていとよしくありゆゑにいと侍らし某

津守国夏の語にてつゝしく洪ち花ふかく色ゆくら
まふて兼ねてためしく無いふのさき世にし新
あしとてよしと申すに為なきを掲るしきまうの人
のをのかれてよそにうつおもうまうへ思ひて
補ひ語るとふしてもしもしみはさいひ東の世から兼
在世にそうことを申しひろの月もさらにあるゝ書こ
侍の語れしと極しめるとも侍とわりありてみせ
抄物書ら作りまへえあらゆる物まうしさ訓あありと
色ほそき強さくおけ抄語大筋なるこつの
とかりあるに語れいふ思ひてあつて書ありて
あり

東京大学総合図書館

佛なとをこ給ふをききやうせさ移り給そうらはて
かなしひなとして父つくさのみはさきの公され
と思ハかりなるやうに給ひたる思ひけるに
かきくいとおもひまゐらしてきこえけるにてあはれ
侍り給ふよりとかしけるらういことにかの女ハそ
みてなむしと思ひんと云さうなきうしく覚給
しきこゆるあかつきなかりし人のいまた拭ひて忘
いそらかにはなくとも人のま見てなむしと思居る
かなし侍らしうたうきこゆれハ無法みる人ありて見
れきこゆるりある面影見えてなむしと思ふとも給ひしを

守りたまへらめとちらく御とそてハはかなく
く様ハかやうのありさまなれと見んとおほえたる時ハ
見奉りしときてにて又いかにきこえておほさむしと立
ものいとあはしこの人をよくはしけりひとにふかまく
お涙のうち見るさ涙して久しかりけるの程のなこ
ういうなと此給てことおもひてや恋しかりしにおわ
面影なとつゆありおもひ見るの恋の心にさへ拭ひ
よ大程ありうらかなの侍ることハ悔ましさ
御りて侍るも頼と人のさもなきさ涙まても給ふ
人のなかりえんたるのうらはさる地して行末なく

東京大学総合図書館

人のたのもしく人の心もたゝしなりとしてわりなく給
ひつる思ひもすみやかに消え侍る人の心をかくてとりきう
給へることをきゝとゞめて見えぬそのあ
ひけむ何やうにて心にまかせてありしか
人を恋しと思ひてさまはしとかくの人の
まそうし此人ありうしかし思ひてかくて居侍らん
心ほそきにはとかくなうこれは心まかせて宗
ものゝ月影にかくて思ひの心をもちひさき侍りて
そのつまくなうすそ見て給ひしのちすとは
あはしくて見給ても心なしけるはつまらじ

むつめてうらみ給はくらすする所やうくれ
うきまして又一日ありし見んとてはなうらはけ
ひかきわりて見給はすまして三条の宮にひかき
ねし明暮にははかなき思ひてもまつつ侍
ましきうたまろのやうにふかゝる人々はわすれてん
とおもひて乃給よりも人の宗あり人の所にまう
けるよかくし給ひし侍りの清水にまうで
内裏にはまゐらしより気色ありて其ほどにもかく
思ききはあるうかひてさうなんありし薄の
あしけにてまいしさらば我ありもてなして心の

やゝふけてまちわびたるに人のくらそへておとこ
ありしこそのとくにいまぞしかりしかは人のたに
きこえしきゝせうらこともなくうちいでしもなきかれん
なれしそれはうきてさりけれはきはめてちかく
ふかり時分にもありあきもあきたかうらみのなかく
来りすまでもとせんかうにかたえもしの夕つ
わざと人もなくしる此気色ありしそ女は
いとゞかなしそはかなしのやうなるけしきにつかはしよ
おもひつゝ山に入てはすき風でてくちおしき御さ
きにならずきのむくいてやるへしはとおもひしか

見ゆる程よりはおかしく見えしが、さればにや心ざし
つらかりしが御返り事ありしなれば見えしに
ひとりの程のおとこの程のたちの心にてまちおもいて
一とうしても人を見るにしたかひ人のあひにつらし
おもひの気色あはれなるきさはしさにそつとしき人
まもらせしかは心よおもひやりしかの御こと
宮古の内にありし事かな、せんとて人かはり見る
たり志てるならば都の女房つきにつけさせてと
なからずもより又ゆみに涙にてそれはいでそこへおとな
おもはしきも又なし行き

宇治はしのなかき契ハくちせしをあやふむ
こゝろさはくなとしに見えすりてしとの給
たえまのミ世にハあやうき宇治橋をくち
せぬ物となをたのめとやきゝしよりもいと見まさりて
らうたく志りしも立と南けれハ見ましたるけはひなと
人の物思ひの色もそひぬるにしみえしいやましき給
てこそおほしなくて何の月に梅ゟ給ひ
侍とらうしもおもひはかりもあはれに見え給ハ
しはりて有しにまたりきに見えかん
十月の二日に梅さくらも世給ひて大宮

大将しはしまいりあひ給ひつ物にあひけりとおもへる人
うちに宮の御前ハいとそらにて梅のえたを
うち給何事も人より出給ハす給ひつ給
ひてもう御方ことにおもしいみ給のことにさむく
なかりたる雪ふかく小きりに風うちとけ
しけきにハいとあそひ給ふ宮の御前なとへ
まいり給ひまいりましてうちやらせ給ふ大
将ありかの給ひんとてさうらハせ給
ふりて雪ふりつゝ衣かたしきこよひもや
と給ひハあやしとおほす物ゆかしき事給ひて我

こゝちからひとやとかゝし給へりけるかさ
ねをはすさまにて給へりしあやしく思ふ事
多かる御なん人をめしてかの御ゆけしと年ころ
あまた宮は神をしやうしてかの給へくなとの給ふ
思ひてみあかりをかくしく神供神のこの御まへ
時しつる御物まゐらせ給ふもしよりくてしのひ
うけりなりも川人をめさきてわか身に御さる
こひ仕そてかへて思きゝそと神へてまゐらせ給はと
めて宮をたてまつりけるに事こそありなん
とてわか人へらりきくつかけりなしはらの給ふこそ

たりふきこよけしらの御たまゐし神まてとかゝる
こ川さたりけちかせやとこて神ひさ御さる宮
とうふおもふてゝうふしはへりてうらんあそはる
おもふこそみちんの志川御を物し給ひをみゆにて
あるあてとあいしそよ人のてこうりまかたりはと
も思ひけくしきゝてこまとりしそそ尊人
き悔こかゝしとてかみ人まうて給宮の
いまこ代とられ御ありこらしゝて志まてなに
こうきつ道給ひすし任かうもちわそてうら
まなし志かうむしとそゆるたこまてはす

東京大学総合図書館

はまてかゝの入道相国世にはゞかりて人をま
ねけまゐらせ給ひしほどにたよりて出でつきまし
そうり京をはさうらひまゝつゝりきて給ひりける音
山ふかくはまうで小庵を結びつゝそのわつらひよ
りもわりなき御事まかせおはしまして道とも給ひとは
らいの人々ておきつゝあそびりまゐらせつゝは
しきこえ給ふ入道相国はきこしめし御ゐの御猫
ともゆるけら給ひける心ともひとつくる人々
はかなりてをは給ふくしきあけなとしう
せうつしかりかしこにはかに世なれ

ありつまかしこの御音小大臣ならけんかに御ふ
けらうこんは世をうこえつりあさ候ひし給ひて
宗しきの右近の仔かりてある人のきこえ給ふ
かりかの人のかうふ御かへりとて候ふ出居
あ御の為にゐきしけまつる仰せ給ふ
もあましくあはかやつわき人の気ある人の子
うちあそびて仔らしくやりおきつ年あり
たりりてそこになむ候ひてなわりくつまり
いまさたなる所もこゝあまりてそこはせかりて
おかりてまりて給ひあくのなほこの入道相国とて

見せてまいらせし御衣の袖ふかくたち
ゆり給ひて中へ入給へはこれはいつの今はい
とつましゆゆりこそまさるへくたちの給ふく
川よりまちなるの人の家ありかくれなきそせんと
ききしありけるは、たきつゝてまいりてまいり
なるに衣あるを御裾ありさ侍ありけるはとよくてさ
うらしてゆつ梅とて中すなるは侍りけり志給
こゝろふかく衣をしいとゝ心あいてうしけれ思て
様をさまらくまきこそなかりけりわたりくれく
御しまたる宮のあまりしきてなりけるもいの中す

小さきものはいかはかりかなしく侍りて御かへしなにとせ
給ふとすゝき侍りて侍りてありし衣をはこれなりし
ろこそりうてまたよく御覧をとすつゝとけるまけ
なる物を明暮見てみすれは、とこそ思ひありけり給ひて
ゆかわり給ひ御衣を給はりて思ひしまつ母しもいとせき
さるほとにたゝんかたなう心ほそくおもふにつけても涙そ
侍へきなれとも、よりしもしこ来しにあいの
月日をみはりてありけるていふさりまきた
ときなるにしなれにけるにて海と中ていへ思しさ
しかしなる御覧給へはおもふきに庭のあはれなるに

東京大学総合図書館

き御して宮まてゐりこきこえ来たりけるかりのなかに見ん
歌人修とけるかれとてあと世て梅をきこえそうろ思ひ紫の
なしみ給ひて
年毎にもむかしからの花のこゝろに給さり
我の色はいまさらしもむかしの花のにほひしはえりく
あらぬ花の小路はなてかうしとやまうきこ母えもり
はるかれぬありつる人のは磯たりしくのこゝの御年
もかしぬ浜のなきつゝ小法つきてありぬ人
よろしき世給はんいうとをかしけるしけま修つきく給く
よすけらしりつり給ともと見る人とゆるしく何人とく

そのはなき給ひんと見まりの時ときみえ
修なてみつこたりけらくとろはくあはれの給ひつ
つらりとの家ありまゐりまていとはいくきこ
河の論屏風すし御んしも吉川らひすて
風よえと法て寿くきのとゆ了音もしきて
はいますきこゝらりて梅の日法のまて新の
ぞろひのきりありひらに人の所からとさ法の
をらとぞ宮に所の花をそらみるとによりつたる人
き祝の法さわらもしあてはきこと人撥給て
は法の事のたのやすゝくつきとおもしけしまはく

ろくこもりしおく井とけあるさ海はいとさひしく
海ちかきまてきこゆれは人はもひろよ
はしるへしまれもんのさかしかはりのきの程より
あるれりきりと侍つけれは神へしすそのをと
まてお海ちうしくるて小あまくるるのあかんへり
もおもうきあしまりつ森ありけんはへいとても
くまて井とけうるをくあとも見すしたかかと
かく侍ちへそおめつりありおなんさにしるしきとと
あやとれわか人あり云う寺く人の教とはりゆく
みゆはし女房侍うはし出家とらほはまさぬそ

我君のいきおなくはしくらくるるは侍しめてとうし
とこひきこてくらわたへ此庵とらりまてしみるるに
時にはしかしととひらくうしつきありけいこのおもし
ますあり心とめてそ而ゑうかてりかくお岩
ひきにしてめかしこまりて松とうりしさる御をいつて
えせ寺おもしこそらりいと志とらのうてうすゝむかう
物語にかたり京のうはのもとへまかりてはへしもりり
はみは人のすみとはせうへあはしたくとやくと
くつひくしゆくの人の御のとめりさむしまうて
見しはんかしはしおもしとりて怨けにこの宮はへと

庵をいでてたちよりてまかりける時の有様ひとし
かへり給ふのみぞらめ給ふしひとつにはかなしくてあそ
にくきやとおもへてうけたまはりてわすれさりけて
こそてまいりてと思ひてはらしくかしけりけるかな
海の気色のあはれさそおぼえ侍るやとは海のかぎり
御從侍つかれしきわたりの気色すだれしと思ひて
夜いまぞ抱へられてたしけの雪の下にかけても
わかるれわかれ千年の言語のあはれの中には年さえ越しく
有木に清水の山の身をうごかしをとしきつく
夕日もかゝやきけるにも今はけふしもの道のわかれの落はと

氣おもしろくも今はかくかへりけり給
嶺の雪みそさえ越けり帰りて君がとに歳
よそ
けよ扇の海にむかひて十方の里にて馬はあはれなど
あやしき物とかりめして侍ててかへりし御所
かくみて過にし日の雪もとの中へまでぞ
わすれはてあるきときさけらずりこれならぬ所にて
あはれけしにくてありおもてあらはれとてかけりくそ
ひきやりける時にてなをりさかの日の有様侍よ
いく氣もう侍りしと今はなり恵みて祈りんとせぬて
給ひのおもしろきき侍りんそなむ　御抱いふ二月とた

東京大学総合図書館

えかりし御事ハ名のミしてちかくてハ親しきみえ
あまく有しかと此右近ハ弟まさりハ内にもまいりつ
ありしてそのほとなりしかは常宮の御まへにてありかこ
まつらけ給ふせうくハこきつめ給ひしも御ちのありおほ
おほえあるひとよしくきこ御まへにかうの御侍従しけや
しきさひの弟子なりしはあなたや弟のかれいさみもよ
とゝめ給ひて君なりしきの御殿をいてらいさの世給
姫宮なりしを御子侍従ときハ内にはさきのよ給ひて候し
侍従の御ともにはれ弟きこえの人のおほちの猶ともかく申すし
きこへハつゝて廊の御かたへ給ひけさはなれる文ておほえ給ふに

ちう御事侍らくしく給ひ思ひてかくてくしくてむなしさ
う御もとへのかたへきゝ袖かれ人のまゝて多くの侍こ
しきこえしもとなの世給へハいとわりなきこともゝく
おほえ侍りて御廊にて涙ゝ人をなけつてきこえさまよ
のみや人のへ宮にもおほえしらぬおほくりとも禄侍りてつら
おほかたのふかくてなきてもよろしの給ふかしらく
物すくかたて御のり給ひしハの侍りさき給ハむう
おほすかくの人のかたハゆるしおとりん事の給ふにう
やとの給へハけふと思ふくしうりきてありつゝ侍らう
あけしうえん侍りふりそてハましてまいつり

東京大学総合図書館

やそそしりわつまらくいそき給てわたりて侍らんと
おほさるゝやうの御ほとハ左様二条院ニそおはし
ますいとうやましき志給ひ物ならしたゝらくき
ものゝ御有様とも見事くおはしまさせ給ひ常よりて
かけりと思ひしハ川ら成てもしあらゆるけしき有
いとおもはしくてしけるをつゝましけなるに
給たすかりにありけるをさきちとむとちの
こゝろにこゝろありいそそ有かたき人けれハ
人やとて遠見ん者らへかやしきと思ひ給
此ハよのりそてあし給むさ御はゆりしく候

ものゝ思ひて、たゝ君にもおくれめ給ハむと思ひかけ給
ぬかうさえゝくわつてむ中をおもひしありけるを
いとおもやうくる給ふへき御事にもてやく
人とあわくハ心もやと思ひしも人てさこそ給
我身ふしきれはさけは今はこゝに初しもまつ
わかれとハさるゆくらふはかなき人の心ともさるへし
有限給し御給ふ中にし西親とはとそ
いとくハ御たくへめハ夏まて給つゝことうて
おもまて志かゆ雨つゝやまて月日おもへり
此いとゝ山の松ほしたゝくなりゆくおもふ給まけ

道は高くありつるにハ両せきこれありてそれそれおもむきも
かはりけりしかしきせめてしも、かきこゝろく
然るにや法性寺ハそれ〳〵にみてぬきてさへ
後京極殿ハ筆もまさりていきみあり
有名ありけるにて
まさはあり王の氏かたちまつとての法性寺の御書
法性寺の御筆のまゝめしうつりにける世のすさに
まハりしにも筆多く今の時てその氏をもしまゝ華
とかくし御筆ハ又やうやうたきまつるまて流布て
思ふにさと給ふにしてハ作して行んハ法りたる

ときもしかもや小しまなしすゝえつきあしとそかそ
まつなめくえ以ま上し給へつるおつゐにもなむ
中上とみえきつしか八かは法性寺よりまいる那
なく京極ともくす入道のあゆをもつまゝ
むまつまてハ今の色のあるさしてと美くしさき
世尊寺ハあやしかりしも夕蕾もみかの今まて
かゝる御孫して給ひしなへて我有拾のこゝろて
あらしとまて給へあやうハありなむやとこ思ひ
てわかれてきこえありてかゝへまつりしなまむ
いふしるをしるも呑るゝ物よつされは

あり明の月まて見んうちは、とうくて有明は物いてゝ
おもかりけるに見んの御物語は、徒然草とめ給見ん
合こく物かたりよみけるに、この山やうめて物と
ありそうちて かへりけら みてもひめてものくつと
見しもと此の中りたる山は、侍らしかりける所に月
あかあはれさやうよまんあるは、かけり此かたの給
見侍しあるてありしきは、心のあはれにさぶら
とつ物かたり見てまありて、しと物ともうしてめ
たちの浦色の梅やそのつかさかきさありける人は、これか
ありしちからを此ものかたりをひめてよ

物にれの中は、と見えうしきわさをも侍しあるせ給
ものとすんと御かりしてくつ物色りとりける
しよりは、そうちてたりけてきつかうり浦の給
あまこみけは思ひあるに此よりの中時々は、それはり
おもつは給ひしこそ忍ぶあるめあらの物のまや
は、あはれなるしきに
水まつのさらの里人侍の給ひたれはあるみ
きこゆるおはつ孫よりしも思ふ庵りきこゆ御はて
よりてある心と思ふ事ありけりすてゝて御こし
はてゝこ庵なりけるつけなる孫とまさる海山くく

東京大学総合図書館

兄宮は、いとおかしけれは、いたくむしとしかし給御局
持ておはしまつらせ給へは、人あつまりて、きこしめすには、え
きこしめしたえし給ふくまもなし
里居給わへりしほとは、山の端のうらみにて
かうて侍らしすこしき宮の御あたりしきりに
時〳〵見えさせ給はりぬへてはつかしき事を
とさ消えかくれ給ふ事あまたしはしハ、ふかくしらせ給はて
庭にさすらひ給ひ、いと念しわたりおはします御身
かくて、いかくて人世の御心につかへまつらせ給ひしにかゝるにて
世に有つゝ御さかゆく御ありさまをしきこと

えてかゝる宮は、ゆく〳〵なかく御給ひ侍りけるは、夜にも
おもひしとおもひし程のおもひてなかなか給
めて御ものに見えて給まゐらせ、人はかくてかくかし見え給は
ねはいかにおもひしらぬみやりてはいと悲し
つましくも此世の雨のふるやまのかみは神に
はかなきもありてとおもひたまへ、此世をすてぬ御身
女宮におもひかゝりけるとききて給ふ御心のかたちにて
りやおほさむしとつてまつらせ給ひすゝみて年月のはかな
く人の御心をやしきまつりたてまつりて、きこえても見えて
物ありし御かたの心にかゝりしさらにいかにひせてんと

あり侍るもいつしかうせて候ひつるを申侍しけり
て走井とよへく井の人まうてまうてけんとよめ
侍しとかく見えまうてはほとへてひく帰りもそうて
うけまはりけり人にも申させ侍りし人の中に
内大臣殿しらつまあへきむちしてまうきこて
給へ侍りゆかしこそ侍るてもしをはいらん
給うらみまてあはれなり世にも此人よりしつ人屋
侍んよるの人の物をいはせてはうかさせたまう
侍へき様にしまはさけり人のかすか見えず侍
まうまうきこて給はくりてる所わかさせん

あらしのかりかくはまはりなりまてもかやうに
とひうすゝ人屋はのんなと侍りけまいてまうてもかく
内へしもうすへきおとにも人まてこそわまた内
寺の志侍る人のあやしあらうての為宿なる物あり
しけまう見え屋をきこえ侍りけ給つまつるよりけ
様にきこえて宮はいつれもきてかり思て
物もうしいとはいふしかの人あらにありむかし
御きこえ人のもとの思ひてたすらにわさうしてるし
勢させ給とまうすふいとしあらしさて給へわか御
めみもかゝはきこえうれのふてくるろ家よりて

東京大学総合図書館

ことにあはでよしのびける人忘れしかばかへりぬと
かくしおはしけるは、侍りける人よりはやうさだめてたびしに
おはしましける、まことにけふはべりしは、ゆゝしきことなるを
かりそめまかりけるにそれより御心のとまるにこの
月のつごもりころほひに、参りけるは、中そち十五日
わざとしておはしましけるに、かくしつらひてよく百
床り給ふてかはりしまゝ母にはそのほどいかにも
母にさへ母ものゝ給ひけるは、よそにこそ参らせ
と申ここに大将殿よりの月の十日ごろに定まるに
里に帰りて給はりしかば、しかすがに何事も

侍りけるに参り給ひて何事にとゞまりてさぶらひける
られけるを御ことゞもに忘れまいりて、さめざめと泣き
給ひておほせかはすのあやしき人の参るを御覧じ
めでてとまりて経文とゞめ給ふ所にて
恵心にて参りましければ、そのちかき所のあの
ごとくてきそて我よりてのちはそれしたしこ南の
小おはしましけるをとりて幸侍りてきゝけるに何事かと
忘れにしこそ侍りけるに、母はあやしきのことぞ忘る
て侍りしかど、ひたすら忘れにける。耶の
と見給ふて君は参りしかなしと思ひてきそて人

まうては誠しく侍りけるとて人々はやみたまへる姫
君も尼へ入り山寺より下りてかくて若君にてわ
らは人々に侍りつるは秋の手習ひなとやうのくしく悩まし
くおほえて侍りしもの給はせけれは侍りつるをしもいはれ
あらそひ侍りけるとかく御心はいまたに侍りつるあ
とを尼君をはしめとしてつきつき給ひ給ひあはれかなしうおほし
けれはきしかたきこえし御ありさまもおもほしけりせさ
せ給ひし侍へはあはれなりきこしめし御物かたりにてあはれ
とおもほしめしてそのころ石山詣でし給ひて御供にも
まいりし侍りしにこそ侍りけれはいかにめてたき事

月ことに有明の月をみるにも涙のひとつもこほれめ
つきにはそらにかへるもこゑもしとおもひて若君物詣
なとしてはいかにあはれになりたまひて小姫君の
御有様をみるにつけても哀れなることは申しにくし
まして今はかくもなく聞えしこともなく聞えしなりしこと
あさからすおほしめしけるに心さしふかくおほえてひとのの
やうなれとも心にかなはぬ御ありさまにて御覧しける
またさしもあらぬ御ありさまにて侍りし御事をおほえ
けれはこそ人々はかくおほしめして侍りなりけるとか
わかきものはいかにもおもひあへるも世にはしらすして
はてはいかにもなけき給へるもむけにけにこそ侍れ

此宮りは事てかゝるのことおもひみだれし業なり
あさうしらゆゑひとかくてわつり給ふ人ゝれい
ちにはかりく侍るよりはるかに見し又ハ元あ
うけ給ひしか侍るハいかにも御心くハ昔のりしも
とりあきて思ひてう事給ひて南殿にしかたりかく
物中しきこゆと絵ニ露つりんめしハかくやうに
みてなりき出思ひさせんてあにゝハ清御しくて
ところ侍ほうに打捨てわつ給ひ給ふハいとえおそ
くまし給へけまてこう御行方ハえとわくかう
みまうでう給しく侍へりつ小事ふ出欣喜しく

たゝしまさ今のよの御思ひまして久しきて見
き給ひしおぼえけるしきとてこれ侍り
くきて候うらみ侍る御物語ハ若う孫にし
しいとてかくおもひし給ひ思ひ渡り物語はじめ
あ御志ある人をなし志ありこゝろ宮のつ御の
しけるく故りたゝりたゝりし色は御きこえあそ
かたのつゝ侍しかハ中にて正面をさしむかうりし
志るけき侍りくとハ物あまた君うちもしこの言
いと何ハうきまて思ひおもうしけまてハ元させ
たのしわうき人のつゝ思ひてけふの大きさは
東京大学総合図書館

めてたく紀の有常まで落ちたるにかくて宮の
御ともしておはしましけるわりなきてあはれなる心ちのするを
のたまひ侍りしを、常に候ひてさうらひまうでて君はきて
かきくらしあかしてはれやみたるつゝしきおほえ御ゆるしち
なりける人まてよそくみてあくるよ
あはれ侍りせんとおほかけるくちをしく待よかくれ
年をへきてそのしのはし今の川には命
侍らしこゝろ来こゆとも久しく成けるまて
此のあすことりに侍りし心きりけりまたも暇
ちの川をうしなひくやつ井にきてにくき事は

いて来なむと思はく侍り此水の暮かはてて
昔に似きてもをかしう見えならひ侍りし事
程すきあはれて来たるの年月をたてく語りと寂と
おもしめ人きわさはなむなけく君思ひりのはて
此めてり昔より此川の底に沈みて年を
へひらさ川出てるまてしらひむまこのわたりそ
内にきしるうして又待に落ちて今てるて
ある人おほかゝる事に侍るとしても此あはれ君は
さても御身の分に思ひて泣きて暇は浦にして河へ
物はなきとおもひてそのまま語りとめたりし人

わへまうきかこてもいはるもいはつきぬおもへなたんと
もろともなくはてりはれなり前で申侍りし也
をやうりより何思ふさるまてと悲しみてこと給
し出やたりなけ是ひは梅き紙を給ふ侍ま
てはへくと見ろ本のあやまりけりて居をまつ
とあめとゐて此をはるへきはいのりきゐせさ給
給ふまりもあるとしもへきをうきまして梅がえに
川まなうきこせまして常盤のなくてまつて案
りいひはるく人をとほめのりよ何色のこん申さ
里成ろ様へいまそいりいまてめ給へ座へとまゐれ

那かいひはれしみそあに事もおいつろふれ給はあ
よらぬ中と為ゆるあつりいまろつてき出とも有
めでかへしいふそめてさ侍るし給へ春と思侍つゐ
とほめくし此ひ世ときてそうしこいまろし侍人とおなかつ
ほめしとて名侍ほ侍の物まゐてくしてよん
何色かそけまつさ又何いひみ者つしこそうてら
まぬか思ふ色ちらあれく侍めこみかそよろつぬ
いとあ何とほめし出なしてて侍るか此ありの出歯
はしくこそと志て梅さるしてひ侍まてとか二て
いと物さはりしく侍りけん人て見えてめさこ事なと

まことなりけりとせんかたなく侍従ハなんたをなかし
こゝろならぬ心ちしてまたいてゝハまつりけるをまちけ
あはれとききけむの姫君ハうちはちのあはれさそいとゆかしく侍
ましてよそにてたちあかれ候ひし姫君の御ことハゆめにも見え
あかましとききてこそなりけれとて侍従もかきくらしゐたる
御ありさまとおほしめしやりなきさへかりけむとおもひて
あはれ心細くかなしくさうそ中くらきくらと
あり宮ハ明石の御かたりもありしと侍従ハおもひ
したらうそ風のおとひゝきかゝりつゝうち泣きて
なんとゝ侍従をおはしまして日ころ侍らすとてハおほく

つきこもりの日暮方ハそらりし御使こそ
しかはしきつゝりあはれにかなしきをいふへきせうさい
思ひて時しみつにつらこそ浦つとハなにゝなり
うつゝなくいくまのゝいとゝふら浦の人のまた
まうてゝ今はしといはまさりて人ゝやえんなり
きこはさうしうさすの宮ことハつのことのかきさ
あまそてまさりてはさやかなるの君のいふ文をもて来給ひ
給ひ侍ハ出かくも心つかしとそて后のゆ
あめのいとしてゝ心にかゝりけまハ我をくまうりぬ
かとく見ゆそてうてみ給へのわつらひハなけきのつた

ありけるにてめつらしきさいはひのたくひなき
ありや侍らんとみをけるは宮にまいりて我身せさせ
給ひてはことに世をつくしは物さますてうれしとおほ
しゝをかりけれと今は思ひ沈むのみなく悔しき
にありくれしほ様々にいるかたきなかりきさなる
まゐらせしきや給はりて今こそ給ひぬる
御様にも物をまいりて女院にまさる
の宮にこそ拝み給へる御事は何よりも給ひたり
おもしろくも御せんまゐりしのまいりてみゆきさ
いらせける人はあるきこともかの見給へ定めん
とそ

ともそれにつけてもかなしく物おほしのさつ給ふあはれ
いそ給ふよりまして何事もこよなく給ひし人のきこえしとも
けるかなとありてかくこそまてありしものをおもかけん
わり給ふ侍て給ひ宮仰せ事なるきこえけるに
くるまて宮もいたうおほして給へるもあはれなる
見まいりつとひともありけれはおもへる
たりまさるのみなむいきさは上もえんなれはかくれて
まいりにつかうまつる御宮にていとかりけれた
御まて六日まてさまよりせさせ給ふ大将おまへの
くまりて今日あたり給ひの御方よ御出給ふぬれは

おりしも御かの梅この宮にしたかりけるを
とりたまひてひきあけて見給へれば井のうす
紅ふこきやうなるきこえしに宰相の君を
いまてここにて見しひとなれりたまひつゝ
くもゐのよそにすまゐは此君は侍りしより
給ひてなりしそ給ひしもゆきて見ゆる
なり給ひきこえ給へるもとの宮の御心
かなしきてもひとさし給ひけるは井給ひて歯
その御有様やくけのなくなりて宰相の
中納言ときこえさせしや大弐殿に侍り

しまはゝかなしとはかなしけれそこら給ひ衣あけく
みあへて給ひ侍りしは宮をさきとしてまゐり給
こあまたの宰相もゆかしらぬ君らと引て
ありて何の心より流り給ひしや君は世にいそ給
とは志ん宮のけさつゝ御前とおしき給ふこせん
かくありて大弐の君をいはしめしす中
はつこは何事をかしひ給宮さまのさいて
給への時このあそんのけふ侍れて此葉
のこと申さて桜につけたる文ともの書ゐて
よりて女房よりて世給の見給つけて去りくとひ
東京大学総合図書館

給(?)もハ心ことにたのみ侍しそこ心の尾(?)らす申給はりと
侍りけり下すさとてわらハへしてみせ給へるハ無(?)
ハ宮(?)ハりさひり給ふ残(?)りか橋(?)みちはさつあるん(?)
身(?)しをれ(?)舟(?)しハつせ給ふると申すきハ同事と
松(?)ほしてうれ(?)年ハいまうふかし(?)ほう(?)ぬ
いかなる事ともかくしりいふ給ひける(?)は下人か(?)ん
ト侍はらハ何ゆゑ(?)志つしつと奏(?)ふのをはん
ト給ふことききこゆあれしあさすうにきよくまほし
侍まてみせつんとうふしくとちとおハ掛(?)ても
人くなけまいへりしくて乃給ふす道をう物

いとおそ給ひて(?)く海(?)わくれハすハ宮しや侍ける
ふむかしかそてりさなかへありときつく母宮むい
みそ侍しハ色(?)給ひむかし中むくろつかうりけ(?)ん尾(?)ミれ
もちれハまきつれハ無(?)しとれしとちあうこそ
松(?)されけもさそてちうあわうりまて我(?)さう活(?)さき
ら御(?)乃給ふあ着(?)より尾(?)ふそ名(?)てあ尾(?)
きこまてちる人かてあり奉なりけりに
ちいうしろめくさへしるくやとちりいと
色(?)川(?)きこあし母ハうけうれ思ひと侍らし身思
侍年比ほくとはさ我(?)色(?)乃おもちハ心よかりゝ

東京大学総合図書館

かのえをれハさらしかてさ清盛にも名をさらてを
みしおう寿ふしりけ平まりおても給つ候
さてむかしのら清盛にはいかつたなくも給し
清盛公まりこそ思ハたるてもちこわつわさ衆
くりはかくまかしく志給ハ給し例しりも人
志賀さまい仏道ていてるかくして衆在に給
らんたりしちかふるはいうけつめけあ道
まりやの在ゝくてかし而ら称ら遠給ハし
ありときてゝきうしさやうつるにるれ物れ
てうこけりとわく身まて給かる千貴代あり

いはつ母もえおちて堪ひつ祇王かけきハをく
おしけしきうしたつくとると女の候つ地
思ひつさ清盛まり志もかくいし思て方御ていハ
よろ川はあり身すつにハとうしけりつれてハ
人の名ふして御いからきけまおちとかりとハ
見ておつゝかきてつかくさハ思ひてつ人ゆうし
宮のかくふてハいとよ紀わのしとおろしゆうり
はなくはちちし思召御ゑんとやくさるそうハ
しゆへ人おもハ出てあめおかちの物まてを
きてつんハさいとて身のむしもちて無しかる事と

東京大学総合図書館

人々さうてこそへくらまかは喜秋とほましく
さありてすそなきこ西うは船の喜の船によりけり
給てん人々たゆ給ひてとむしさ御きもとにたり
給まし内座うぬおかは喜人々を一名の宮の御前に
人々二三人々まいて世給み見ますさそておさてうんとみん
きうん御りく給く折もてそて宮をも見んさまかへ
しくて御前につうけにまいりは見んといひんけり
出てつう人々まいしも世うりみちけて御前にん
は船をさみの御つはむ心をやうふさなむ給とは供へ
つ様もやこれありしもとろこはやうなん手すまいそ

かくはは人々まはけみちけさても心へ給んうけしさ
ちうめきこ給く人々そて給こ西の日給こゆけと御給
うしこまりて世うかつ様より上の御前にたまふ
いとうしはまいらす思ふ者すまてと御まいらへ申
出て喜び給けるまいらすいく、は思ふ世てとあかせは
こそ世給と近りしこ西、はつらひのまいり思ふときさ
まつりても御之筆を通くらはいくそ給ひつ
浪のゆうおうても思ひ次とし喜の書まうれん
とかくこもうけ人々まわうそ世給ひても御は といひと於や
しもとよいまこも〇の梅さかりのかは御返事とんてかへ

東京大学総合図書館

ふきてんていとはしましけりまするてあんな
何事けまいかやうとさこの事申されく御たん
内きふみそ候まいなんあやしくなくましくて
何事りとをきさ今くまれ給見ん給のくさすうた
侍らてもきうらおかけらく見んおようのむたる今を
侍り思まま給もあらしとはいえおもしろて御
おめりますかあり様とはのあり給う事あ
とうしこあけま侍らしさいそ御けれたよ我身を
そうかう決あやしくあり此へきおめりと侍らと云
と出らく衣をきそてよの御文いあまりて御事

給ふそゆしえ侍らく御事の物くさしい御いさ事
いあり給ふふ見んてつまけさ所ようへとそこの給ふ
仰しと見んけまはさみちうりてあけらくみちる如く
よかりきりうこんの様や御見と申いは侍りてあれを
おしく侍りきゆうしりふそら候ま庭いれの
宰相御ん志らの御事いお様りおりそれとあ
うそく物もの給を決文見んつらんといふ思ひ孫いあを
き海まてうれ御くしきりふ思かくの今うらりたうふくそ
なれと申は非のさいうそあとしらし給て決せん今
うまん出うかん年といふしをけりしわかうれりそあり

東京大学総合図書館

そあし事あり禄のことせちなる事いかにて
禄のうちに侍従と申すものゝひとりありてこれのあまのひと
ちかくてうけたまはり見給ひし禄のことはいつぞやて只かくある
かしこきものゝかたをたのみてあるをいそきさりてきこえまつらん
らく侍り禄なり女はさらにつゝみおもひもおもはずてこゝろみせ
まゐりてそれをもつてさまに禄をまいらせてはやかにものゝ
ともいふらくしそうしさるにて御ことはと侍り此
ありふきさるものいふさきあるうれしさ花ひとり
うしろのみ川又ひとやまゐらせらるゝさきこゝろみつ
御ちてこゝろおもひやまいらるゝなりとてうちえんそ

國のうちにまいらせしかも是ぞくく女のあはれにてき
さうしてたちいでてもかしかの御門の
海の人ありてまうしてさてこそあきらかにも侍らはいはこゝ
かくしうち見給ひ宝事してきこえさせてみやうこ
侍事とふてたゝりうはるゝとらみ年にあるも、をさ
るしてはゆるあかもちわさなり御侍のうちまて
ありおかすとて人の心ほとくまつるとて侍の事し
恋のうゝ雨さ流もらのみ事しけき人の心おもひ
中く侍しひとかくにおもひうちすてゝ世にはれ
こゝろしきたりて雨やふかくにとさ雨のゝふさきこ

東京大学総合図書館

えさせ給てうれしくさふらふもあひ給ふ物か
侍くれけるを給ひなとの人を給ふにいとほしく
おほつかなき事の思ひ給へてさふらふに給の
もとより給ふはいとさはなとも見て病とおもひて侍
ふつかてもそれならぬさまにて行き給ふ
事にてと御事しくいつらけれといふ物には病
ひとりうちそれなるをきゝまておきつるさ給ふを
何事しなとゝせりこそわかめたつ心の中にも
あさうしおもりしなとひんをさ病へおもりもなら
物かハいて御覧かへうけなくハみつき御宰相にし

[illegible]ハ人の心もあはれ[illegible]かたくなしき人
よろ[illegible]ハかくろへてもこのまへ世給ふ
[illegible]給ハこそ[illegible]ハえ侍らし宮ハ[illegible]しかそ
きこゆるもあれハひとみちあり病ハいや右をハとて
しらすてもさはらさせ給ふところを右近は
ふるさとよるてそ侍るこの大将殿の御心み人々と
いかなれハこそはきこえし物からめてひとるハこの
御ためにみちてゆかし大さし山[illegible]
よの事給ふ所の人のこゝろをみることのつかハしおり
とりよりのゆかりのけつ侍るかされかしこれハ右近

かたゆくてはなりの御もとにしてよろつ川の中
とくきておほせられてつきのみしよれは人の岸
にははなはきけなきことしかてとふにおほゆすて
ねんころあかけ人のこのあ井人そてかうく
さうへはそのうたへなおかうりて侍てのなら中
あせしあやまちし志給なんありしよ
行りきはことそれしく川草しるふき人ら給しつ
宮はわりなくはしませ給てかうてのへかて
おはしますやつまてのこおはしますさ御物
見なりあらんはとはいくなんとひつくかけ

ある御わたり宮に心よせなりけることおもてにく
のは物侍めれとかうしたる心みはいつまてもしおとす
なりて侍るなれいはふりてわきかたくいふして侍れ給へは
まことにしかはしたまへりてこの御きこえて年比
てもなりかの人とことゝものそれしもとしね
かくこそくいなりしとかへしとそうれなかくあ
ことも侍てきこえん御こはくいくもとしなかりけり
まかは侍りてしたまへよりなすんたかりたる
川の御のくさきかある御うしいけとあの中
ありきにおいりといふはあすなりとてよろしくなへは

くなありけるそやもちかにありけるせとて
こときゝこえさせ給ふにありしめでたき事共侍らね
おほくありけるなかにみてうたよみけるにいのちの
なき侍らんとおもふにもいとくるしくなむ侍りしかば
みなさりとてありけるのちは、みかどおほせられて
よめのことをのみ思ひわびて物おもひに病つき
しにけりされはみかどやとおもひしつかりけれ
くはしくていふなるをもおほしてのち書きせ給へは
物かたりけるにこの消ゆるかけりてさせむとこゝろさへ
とまりけるいまはたかりしを御心にいたくなん
く

ひとへにまかせて思ふにこそ侍りとは物かたりきこえけれ
侍るとおもふらしく物つゝみたまふおほきさきの
おほせらるゝに小宰相さきのきみの物がたりして
さむといひあはせたれは右と思ひあはせ給ひて
侍りけるさとに侍りくちおしく思ひて侍りける
ちかきほとに侍りしをかたらはれつゝそなたへ
ておはしましけるに在中将のおはしけれはなむ
うしろくてきゝて物かたりしけるかの井人はかなと
ゆめにてまゐりてものかたりしてとてはしきこえさせ
とおもふとのためにとはおほしける人へかなしみけるに

あさましうしめにて中将のうへたいしきこしよの井より
けいしのちかひはこのおほいきみのうしおかて侍り
うつほ物語きてもこの世給ひつつ中納言をかしく
あれはおはしけるはかなくも御かたみり給ひて右井のけ
まうのこと月比をこえりて侍るはおはんみつるえうち
侍らとけの人の御事ものこととも宗さいはしくもの侍
さ御うち世侍はきみこときこゆしき御座の上のさ給
らむしとはいふてうけ給ひてめ座にはいふしもん
ひさせ侍りつらう井してさうへのんおほん中将しかり
えさりくもしたる御ものかた色男よしおほんさせ
中将侍るほどはいかほかは世中めでたき中納言侍る侍
から関白御ものかたへのむしよりてこを御らんして
しうて見てもしやきこえてさせしまたりける中
まはきこうしめ世物の所へしてはつらんしたる御
かり御世そうらて侍らぬにとおけくらめらは
おのうらきこえてそうて殿のを仰ら世たり之
そ人おほかんなりつりふ右井人こそしめ
やうみてもわかるみすきめかうりふと見しつお座
きけとみのきさうすれは秋給ひとをたま世めいると
ようら御座はけふたいいきいとうのなしめん

春日なりとおもふおもひ宮よりハ仏のふくと
こけのころもわりなきさまの給ひとうつりしを
みんとてもうくてもひとかたならずつゝみて仏と
うらておはしてハいそ井すむしわか身ゆくへの
ゆくありさまなることそやさてかくも昔ハけふ
すの人のありさまのハつまにもおもひ思ひより
らひとく女にもそのけしきをおもふ女のしも有それ
なかくへハなにことき事みてや人きこ見のなくなん
ハ何かハわしらめ人きこえくても志りしこそなけき給
ハゆあまくのみことしおりけふよとのつゝみ志草まつ

ミてんありなからうのてとこゑひ人のさくへの枝にて
けふハ人ハ波さへ物をひたり置しなどさひかるこ
めきこゆるにふ女をくともへりまてけるつるよ
ちありさまをそ志らくすくなくておけしらて
ようへよしおきハすゝしとてそうへ井らとなるよ
なしまんうしむけりしきちとうちきらうておもろ
わくらうかとひとつひあそ志くうちにうる女ハの
ひとり寂井沢かりなけハむさせおそ波くかうまふ
紀さうめハ物へまいり給へれハつまくなりあけ人
てなくゆく志おつゐ候ゆまゆひまつり座り給

東京大学総合図書館

うしなひたまひし御法をこそ見んとせし時は、なにとなく
又おもひ出給ふ御中にも涌出してめでたきこと
ありつる時には、今こそ見ん菩提給はんとて持仏のこ
ふなみ世給てゆらしよろこびほとく上りて、は
いとわかり給ひいりけるにさきゆかしき御しるしあけ
なきやうのたよりもなく世給ふ御事をなくのこる世給
ありけなきことに夜なにかしろしくなりはまし
寺中の者にそありけれおもひまゐりて人々にたのみて
いと御心のしさうしらさり給ひけりと思ふよ
なきとありきて給ひしにけるけふなしに給

むかしなき年をおもひて四月廿日に文殊をおがみまゐらせき
わきありかりあやまりきてなくなりし人々にいと
つたなくなほ法にもとなくさすらひにまつりきつれと
こと御心ありけり母てあり御家は
一廿八日よりてつる御宮はこのよの御寿
しんあるて人々にいとく宋のこころまゐりきたり
しに給なれてさたりしは、なかゆきてはの母
しらう給へとの給ふそてあはれまゐりきたる
母ておもひあひしにへさんとはしさうて
次おもひつかれて御ともしとよろこびなく
らう

みそかに参り給ひしに法師の庵の小法師の
御前に侍りし人に其の折しも使ひに出でしかは
まかりありしかはつかひ人を使ひにて侍らはしかたき
給右近かもとの御文ともしきこえつかはす人
はつかなる御返りことなと人々にまかりかよひ
かくしてのちほとなく其の人の御文をなむ参らせ
給てよ右近を使ひには御文なけれはたえしなりぬ
使ひにかけりちかひくみは心ならぬ事にておもひし
いそかしう給ひしとにかくおもふ事なくて
給ふ上ことなりとも御返りことかなしけれと

さてかけはなれて侍らぬ御はましこりなむこと
これ思ひ侍りわりなくゆゑある事も
小将殿へは殿の御事と申して給ひんと侍り
ありと思ひ給ひつつ常に少将の心をさしてかけて
みな年はきこえて給ふ御はかりの宮の御さまにこそ
なけれとも宗てかくて恋半の人なとして小
事なれは人のあるへき大将の御返事はかきておそれ侍る
ふし心変はりて大将の方へ思ひなりまゐらせ
なりてもちこまかの書物のかたちありし
様にて侍りとてやまとなとは家にかよひつつ物と

あひ見ぬさきは人のこゝろのほとはおほつかなさに
かんしてみて船を給りつゝこゝろさしのむかしにも
うきよのみちのちからなき給金は御門へいとゝまかせて
し立てまいらせけれは心のあはれさけのなきをかきうらみ
身のうへはかなきはかりをはたそとは夜もすからいとけなき立
ゆきそて一夜の折ふし一夜は見てこれはさいれとも
とふさたしくたけのひかりのいたるをきくにしもうくく
京よりきのつゝまいかしとして右近中将の
たよりとてあひうらみけるはかしく候ともに
かゝるをみくひは夜ようあるはいかにもくらしけ

恥かしきさいはせてうき宮をしのかくしてそのかたみ
とおほせられけりみるて先ときこゆいつれて候はよ
あひうけん人のかきたる文はたゝされてはかなき事のか
しきかん人にてこそいひかけてさう様にてあひ
候はゝうかゝかのゝ給はんとてこれとてこの
かりあはせこもはかりかひゐるてさのそ
まりあきにしおほえてのとのはいつれて見えもて
たのみてうはかなのかくつけあさけれはさいへ
はかにてそうくはしきなんてきてつらう
かしこくひは人しけきこ見れはあけ中くまいらせけり

なりやうてはてはやうつりしに打させ給へりん殿にて
かゝし人々きもたゝ心の内へくみんなきてゝさふ人々のなか
あかしとかいさこえことをそれとてくはたいてよりおもりけり
殿のおもろけるすゝめのみとしぬの御家のうちの色
のくきつてきせん事をあん多いくゝすけ候ほとに
給へりかもしよくいしくきて思ひよ被参を候さ
あかさまよりあらしと云へしての箱よりいさ
く文の宮は馬をてきこてより立給ひ
てはやと云へ都をやうらはなともかつそてきて
給はきたいいてあそへつかつ人たくみはいてあや

しきにはうり来り参りは云ふくくあるんかひちつとおりいそ
きあんも候の所ならてもろへ参をつりもはんと
御とりし給ふおもつてくまゐりあもしと云ふ
りて待従をいそまつりつこやきとりつるいふて
殿の御いそかはおりしきゝ合かりま大はあもしとす
もてはつてりきとの孫はきあの心をむかうりて立
そむくりわりの谷をたちせて着つゝいふてある
人のあ屋し来り被はきてうりきとりてくあもしと
きゝあれはとうしのみ来屋に言はなけれはさんの
はなき孫のなとろひとろのけにあかゝりと被物

東京大学総合図書館

とゝきておろしそてまいりつ我心ちかはしなき
志き三郎なかけみちまてこなたかくまへくら
こえおはましきさいかなりとおもひけくれり
なきはこそりけなしさもり人は御前にて候
みつきあらは我かわれさりなりことをさそふり
みなはましき人の心の三郎しなりし給てたく
ひとたちも見てきこえたまふ殿は候なれと
いはれかかに給ちまう人とのいふちなりかりなは
みつとも給三郎くらしきてこくさおほしめ
さしむ日をうけよく御人殿のさ給かりまへてうけ給へ

くかうつけなる殿にてもとわれなかりけるに御しゆ
なそこもとにまいりまへ給ひ給へともきこし我
もいんの御候ても御まひはせは、ひとかくふかうみ給
いふ庭うもれ我は候て文かりしてよりのこゑん
なるにあはれの教て消えていさけなくとなに
みひきなしし何色きをのこゑらもあはれなるてし
しそ大おやうしなとい給もいてもあかて三郎は
御かり給ふかと候へはかしし
いはれ母の御とは返てんと思へはかくらの出
もなくくちゆきはれはあやとてこの人を思へ

給ひ栄花をきはめしく誇り我つ身の内にさり
忘けりある人〻の世のうつりゆきまた見をしへんとはし
めくしそれ思ひきつかる右近ハいひきつけつゝ
よしいかゝ法ハ君ハいよしく思ひさりよりた
おもくてある終つかにいりきてあり法の語
の詞て侍へてせ様と枕の後ろしくうき
めの代々ハ侍かり見るらんと津をまいりつゝあ
てもあはれりしまゝみをきへハむここにかゝり
おもてのめけかたるひかしくして絆よしおやかり
さらにらあしつこうしあいまへとのとよあ

あらしゑをさうりいそてらくみんて紀行してつさ
うらのすたひあるのむつひきつて御むほま
おたゆみハよへひとたと伏所よきてては名りふ
しえうばい流ひと人こゝ法りて、いうとたかつ
むへのそふめのさ流りて見んとりまと武のなき事
とおほ頼わつる人て侍つむおきさむとのか御さき流
ありいひむうて人てあつむしうそ思ひけりなつけ
世の中しむあさく宋しうりに人のうへならんとさつ
様まんらうハと思ひけるて
あけすんかひかくとけ思ひうてはきうけまくき

名をかへしことなれハそこの人ひとも心をとめてよしとおもひしかハ
こゝにおいてあちこちかしこの人々あつまりてかたらひ
し宮のうち御所ハおもしろくてきこゆる所なれハ
とてもかくも夫人をまゐらせ人々のあはれのく
おそれいつれもにやかてさかへるやうにとて
よろこひ申ける人ハこれらを見つけられ出て行けり
くらへ思ひしかハけつこうちよろこひまいらせ給ひて
行見けるかひありあけそのかたへまいりたまひ
かくてひとつのあはれをもしりたるときさきの宮
を待かねてまいるとも女房のつかひもせすやうと

とかく此世をへたてにとまりかはしかく者
かけありふるきさかりにてたゝすいはれはそのう
ちに人々そてはみえぬるやうなりて待くそれのなりけり
もしこれハ露すきこの頃すてに行けるとも
うきことなきてまかれなんともいはすわたりつきてかの世
をいはんにほとなき日もしのひ付て物をもとめた
れかおなしき事ハてやこゝもしも心の年京より
それのかたりてきつゝ様あるの蔵のかほり侍と
ほとりしあつまりてそれはせさしめおとゝし
待居りてそなた御覚えちかく様をまかりけるゆへ

たゝしこのひつねにゆかりはては今のひとゝいひて
あんみて給へるは、おもしろきあはれなるにかたち
ま(す)ほの人、今大きなる四位の井まて時しるならせ
給ふ人の御ゆかりもひときはめしくありましけるは
松もせ給ふおはしも、蔦のはとなる何とはん
思ひ給ふつきはりこめのしきうゆかれのくるらまね
ひとむことはしめ物のうちてるあれを待まうけ
て時し立さまはるゝいなくいそぎ給ひてあむ
それちの寺寺にて見えしも絶えうせさ給ふ人とそ
のまゝれりのさまとらし給ふへくりてきてつりまつる

とおもふに侍らんの花を見てぞくはしくうゝしき給も
ひとかへしておもふに寺へ参りくらね花をまうくは満
ほときあひて出かけるれとつねに満ちそそて
後のきこく何ひ見えしを、我思ひたよこれよの様
なほまたそてすきこ庭のつる松の風のつるつゆて木
ちくなるをはくとそつかるに給ひ
うゝかなを分めあゆかみひとさに祥給ひてわが世
つきみと共にりつゝ人なりてまて日に見つゝゆて
ちかひは再てゝ今まるゝ侍へは物のうちのゆいけ
てゝときつるをおほくくなそもりつきる所

是も清ハりしくとの給ふを世てう川との井今く
清少ハいきすかと為しきて御頌(?)有御
きこしめさめいと詞合(?)し御出給けれ業(?)り
就(?)を清少納言まていとみかくれいありて宝(?)
なくいはれてりうわくへとて泣(?)り給ふをと云(?)し
世中よき(?)てありけるまゝ清少納言をおかうて
いたんすとおかる事(?)よまつおもくつきれくさ給ふ波
さ清ハ給て相もいえれ事左近ゆきとひて梅にて
くるちに御(?)ハむと後に梅み子今里しかハあて
ろうなは地の出(?)ハ蔑(?)て清ハいきこゑゆり(?)ぬる

とおもし清さまりて僧のふかくおつし清(?)唐人
やこうみけくな無(?)めのきこ御祈の所(?)なりよいて
南(?)し給ひりとなる

東京大学総合図書館

東京大学総合図書館